和朝

今昔物語

巻之十弐

世俗部

十二

今昔物語 後部 十二目録

○世俗傳

一 比叡山無動寺義清阿闍梨嗚呼繪語
二 東國人過花山院御門無禮語
三 信濃守藤原陳忠落入谷語
四 以外術盗食瓜語
五 近衛御門蝦蟆語
六 嗚呼者怖己影語
七 傳大納言侍得烏帽子語
八 於近江國篠原入墓穴語

九曜文庫

今昔物語 倭部 十二

○世俗傳

一 比叡山無動寺義清阿闍梨嗚呼繪語

今はむかし。比叡山無動寺に義清阿闍梨といひし
僧ありけり。此寺にのミ年ごろ居て真言をならひ
なりひ。京に出る事もなく。年ぬるまゝにこもりけれ
ば人知ず。あまり貧くてぞありけるを。されば万の人
あなづりてこれにいのりなどせさする事なし。されどもいみじく験有けり。
此人絵をこのみて嗚呼絵のよく書たり。筆ずさびにて
そぞろ書けれども人めでけり。一筆に書るを見て

さかりにてありしき。[illegible]
かゝる事こそは書ども、つゞきて紙かうきて、そのじん、あ
まば物一行ばかり書てあそふみあるひは端に弓
射たる人の形をかきた。奥に蛙をかゝく。中には家の
ゆくゑもしかいかゝしくて、墨をおほく引わたしたり。
かゝれば軸なる巻物の紙をそて書じとはいえじ
たゞ紙に墨ぬり引まどはしてあるは、異物をもおもほえずわか
らんよりは書ざるがよきなるとぞいひける。ある統
ども、まことゝもせずしてすぐるがかし。癖者にて宵
しかば、世の人も統をもて世のうするびかな

呪師猿楽とつうけがねよくちかくて真言よくかきひ
かゝりけるとは人のかしこまりいたりけるてきも、
此下本文数行文字脱落不可解故除之

二　東国人通花山院御門語

今はむかし、東の人あつまりて、花山院の御門を馬に
乗ながら過たり。院の内なる人、足駄をそくつて
寄て、馬の口を取、鞍を押へて御門の内にひき
入て、門の外までなりつる紙、院きこしめして
何事をかくするぞと問をなひければ、御門の内にて
馬より落[illegible]入て[illegible]

申しければ。院これをきこしめして[illegible]
ければ門外に馬に乗て居るぞ。其奴の[illegible]
りひきまはしと仰られバ二人ハ馬に乗たる者乃轡(くつわ)紙
取(とり)二人ハ左右の袍(あづさ)を押(おさ)へて南面にひきまはす。院を
寝殿(しんでん)の南面乃。御簾(みす)の内にて御覧じけるに。年五十
餘(あまり)ばかりなる男の。鬚(ひげ)黒く鬢(びん)つきよく。顔(くわ)すこし面(おも)長(なが)
に色白く。形(かたち)つききよし。綾藺笠(あやゐがさ)を着(き)たり。笠(かさ)の下より
みゆる顔(かほ)げよりも者として魂(たましひ)ありぬべきやうなりや。
紺(こん)の水干(すいかん)に白帷子(しろかたびら)を着(き)。夏毛(なつげ)の行縢(むかばき)を履(はき)。まず
前乃太刀を帯(お)び。節黒(ふしぐろ)の胡籙(やなぐひ)を負(お)ひ。弓(ゆみ)俣(また)の二並(ふたならび)

征矢四十計さしたる紙にかへゆひつけたりける
ごりたるをおき。鹿毛なる馬の法師髪なるが五寸
ばかりなる八葉様と見ゆる一物なりけるが紙をもて
あゆませて居たりけり。院の下部あまた持たり。
院は北面の輩を召して院中さへある者も限なく
このさまをゆるさせて仰られば皆去ぬれば馬いかに
こゆるに男手綱を取ゆかへし給ふに馬
平地に成て膝折ふるまで馬の乗振すぐれ
たる馬乗ぞと見えけり院御感ありてよく乗たり
とて後にはとくおほさせまいらせけるとのことなりけん。

らせと取らせければ男弓を取て脇にはさみて馬の
内くらは其間中門に人々数多して見るものども然る
男あまたを召して中門にさる紙を出せばさる飛び
おりてはしり出て中門にあつまりたる者だ。おそれに
去ともおへど。馬に蹴られしにけるもあり。蹴られ
たるもあり。其間に男は御門をすぎさまに洞
院の下に飛びおりて逃さりぬ院は此奴はいし
かりける盗人かなと仰られて。おのづから御腹立をと
なりけるとかんぐりけるとなむ語り伝へたるとや

三 信濃守藤原陳忠落入御坂語

今はむかし信濃守藤原陳忠 ○菅根孫元方男 五位下 といふ人
ありけり。任国にくだりて国をおさめ任はてければ上る
とて御坂を越けり。おほくの馬ども人の乗たる馬荷を
負せたる馬数しらずつゞきて行たる程に、守の乗たる馬懸橋の
端の木を後足にて踏折て逆さまに守は馬ながら落入ぬ。底いかばかりとも
しらぬ深さなれば、千に一つも生てあるべくもなし。郎等ども
皆馬よりおりて懸橋のきはに居並び、底を見お
ろせどもすべきかたなく、おもひけるに、はるかなる谷の
底よりさけぶ声かすかにきこゆ。殿は生ておはしけるよとて
声をあげて呼べば、守いひけるは、旅籠に長き縄をつけて

おろすべしと谷より声のきこえければ郎
等どもさればこそ守は生ておはしけれとて
とてあまたの人のさし縄どもを結びつぎて
旅籠につけておろしけるに縄の尻もなく
くりおろしてひかへたるに縄とゞまりて
ひかねば今は下つきにけりと思ふほどに、守の声にて
今は引あげよといへば、引あげけるに、
などかろきぞとおもひつゝひきあぐれば、
旅籠には平茸といふ物をおほく入れたり。
侍どもこれはいかにと見あひて
ゐたるに、又声きこえて、旅籠をおろせといへば

にまぶたり。是を聞て旅籠をおろしけれバ。ひきあぐ
いとかろけれバ。あまたの綱よりとりついてひくれバ。此度ハいとおもくて
おもし。数人かゝりて引上られバ。守旅籠より乗て。片手
ハ縄を捕へ。片手にハ平茸を三ふさもちてのぼり
きたれバ。懸橋のうへに来て。郎等どもよろこびて。是
ハいかなる平茸ぞと問バ。守答けるやう。落入る
時に馬ハとく底に落入けるに。おれハおくれてゆら
さるが。木の枝にとりつきてとゞまりぬ。下に大きなる
木の枝のさしいでたるにかくれて居たるに。其木に多く
平茸おほく生てありけれバ。見すてがたくて。まづ

そのなかうきを取て。猿皇もよつくよ上げる也。いまださ
のこりやありけんいとそゝぐれくおかわりつるとのうち
いでく損を取けるまくらて誰もあれどいへべ郎名た
げはあらこいくの御損よ作しどもと知ふ。守びつこと
なるひと海名るよ。寶山つよ入てくゞるめむかしをしして
得さらん知地なり。受領いて終て下よ出つるめ
とつゝところはらんとし。去てりゞからもそいふくしれ。国代ゝ
の内よは。かくしとてふとげよくするそうれ作れる物
をば何の取をて海いざらん。誰までも取であるべきた
おゝどもやよう御ゝうしこれ人いがるか死をべき際

みと御心さわぎしてよろぼの事なりけり。れおかくに
せさせずへべて抜。かくとせおいてるたなり。あゝれべ国
の政にも息べき物なもよくおさめおいて。御ゑいの
おゝくけてのがれをまへべ国の人いて海のゆちりとこひ
かれをなからたり。あゝれべ未でも万象千秋やえ
しゆとくべきなりすごいひて。己名るゞらへまきをひゆきり。
これをおいてなつてよ。あるびるその事ぬおいて肝心
をも治よいさんしてすゞ平章を取てよそうてさん
ねとそびてひくしたまど名れ。ゆして便宜あるれ物なと
むさぼりとるもろん事るこの事をひゆるれしと。これを

こくきん人は、めぐミひろくたしなみをかへりみざりけ
るゆゑなり

四　以外術盗食瓜語

今ハむかし七月ごろ大和国よりあまたの馬に瓜を負(おほ)
せて下衆(げす)ども京へのぼりけるが、宇治の北に、ならぬ柿(かき)
といふ木の木かげにやすらひて、瓜の籠(かご)をおろし、息(いこ)いつぎ
ゐたるが、みづからもたる此下衆ども瓜おほく取出し、切て食(くひ)を
なしけるに、其あたりに甚老たる者やありけん、手に扇もちたる
翁(おきな)平足駄(ひらあしだ)をはき、杖(つゑ)をつきて来(きた)り、下衆どもが傍(かたはら)に
居て、瓜くふをまもりてしばしありて、そのうり一つ乞けり

くらせたまへ。咽喉(のど)かわきて術(じゆつ)なしといふ。下衆(げす)どもの
いふ、是は人の京へはこぶ物にて私物(わたくしもの)にあらざれば、
得まゐらせずといふ。翁うらみて、情(なさけ)なき
人どもかな。年(とし)おいたる老人をば、あはれといふこそよき事
なれ。よしよしさらば翁は瓜をつくりてくらはんといへば、
下衆ども戯言(ざれごと)いふよと、あざけりわらひ居たるに、翁傍(かたはら)
ら木のはしありけるを取て、ゐたるあたりの地をほりて、
畠(はたけ)のやうになして、かの下衆どもがくひちらしたる瓜
のさねを取あつめ、かのならしたる地にうゑけるに、程も
なくもえいでて、ひろごりさかえて瓜あまたなりけ

りしほどになりて。いみじく熟しぬ。下衆どもこれを見て。この
此翁は神などにやありけんと。おそれあへる處に。翁瓜を取て
切てつぎつぎにくひて後。下衆どもに向ひて。すゝめけく
くはせざりしが。はやくはり出て。くふありとて。下衆どもを
みなくはせ。道行人をもよびてくはせたりしが。ちかくの瓜
くひはてくして後。翁今は帰りなんといひて立さりしが。
ゆきかた知れずなりたりしのち。下衆どもゝ。瓜を負
きてゆかんとて見れば。籠はありて其内の瓜はひとつ
もなかりし。時に下衆どもも手をうちて。おどろきあやしむ
けりしかの翁が我々が見ぬまにとり出して。己が作りし

せしにてぞ籠の瓜を取出しけん。かくて行さりけるなり。
惜しけれど。跡をたづぬれども甲斐なくて。大和へかへり
ける。道ゆく者どもこれを見て。且はあやしみ。且は笑ひ
けり。下衆どもも瓜をおしみて。これも翁にくはせ
たらましかば。皆はとられざらまし。然るを翁がに
くみて。かくありたり。変化の者などにてやありけん。
外術者などにてやありけん。名をしれといひて絶にけれ
して。世みなかれをしらずと語り伝へたるとなり

五 邇衛御門蝦蟇語

それはそうし。邇衛の御門の内に。大なる蝦蟇あり

其にあれば出まく。平なる石の上にして有きれば出入
て出る上下の人。是を怪みて。人をも近よせざる人有りける
人をも捕られば。則ちひらくれたり。家に大学の院有り
きはめて時の学者ありけるが。是を聞てくらくとすれ
ば土を掘てる物かや。知くはなしと給をとらせても、給
まん中くひいあるが。ありければ大学より出まく。内舎乃
女房よ。そのいかんとそ行けるに。近衛御門おち内り。
例の蝦蟆平みて居たり。大学の前にて。他給て在
けるとも。我をばそのん中にいひて。蝦蟆のことを様ど
ありまって己が冠を外らそ。皆りわたりける給。蝦蟇

ずとらへて。人々是をいかのまとかくしさんざんにふむ。
中子はよくし事。ひげざりければ。盗人蝦蟇奴はかく
はよれぞ返とらひて。ちりてされ見りて。おしゝたれ力なく。
後ろより出てふみよくり。ゆかれ上達部。此給へ返
させ前より出されば。大学の前は橋のわかれたるぞ
きかくり。お孫ども此給ふりさそくえるふ。青色表の
衣着たる者は居まどひなれぞくと聞えた。大学の衆。
はそいる見しく教をおげて。物のづきとそれもささに
しめしわたん。紀傳学生蔵京集益くは近衛の法には
の人を倒と云ハの追捕使ともの。らかくはそいへん

ふぞくらひて。家いのぐちて。引出して見んとて雑しき
よりそひく程り。夜ぶかしゆづりされバ。大学寮まいり
おのが冠をはぐる小冠をして。此雑色どものこちまうとし
ひいて其冠をハ何とれ夜つりそ。そが持得させよくと
ひいて走かけるが。近衛大路よこゆづりて絵をと
被ぞとらるて。血おぞれバ。袖をもつてゆさるる程
り道よ臥しいていだくとも抑へどと歯よあてりが
らくして火のひかりを見つるそ。小家よ立よりつ。戸を
ちさかれそ絶し。たび。夜ふけされバ。ひらくに抑ひ
まびて其くさりの濡れたるよ絵を脱よるも。夜

あけて後。家このもれきて見るに。髪うち乱しける
男。表衣着て。冠ぢ。顔うちに血流されよ染みて臥せり。
いかなるもの姿しのてあるされバ。このもくせよ大学の衆
なるて道をとぢて。己が宿所よ帰るに。いかへいかく
ぞ此れ鳴呼者の有さまかりてそみたちりの物見れひそ
みかりけるぞ。此間つぎそやく語伝へたるとぞ

六 鳴呼者怖己影語

今いむかし受領の郎等なれバ。わくれていみうけ
るとむちさか男有けり。ある日暁り。外へゆかんとそ
用意しけるが。其妻未明よ物さそ。含物のりかち

きんとなる小宮何の九れ板間よりしのび入るひなり
かくおのが影乃うつりたるを見て。ぬすびとゝおもひてわ
辛さけびて。夫が脇をそゞかみげゆきて夫が耳
にはやくさゝやくは。かしこに髪抜たるくせものこそ有盗
人がりぞ入てくるなりぬ。出てくんきかへとらへば夫それゝて
かせんとするかや。私くゝた妻かれとこゝかしこにて。様子を
うけるをかたと思ふて。真奴頭から打たんとのくせありて
て。髪ふりんでくれがうゝ。なかゝにくへ出るが。おりけふお
のが影かうつりしをみて。妻ふいあわでぞちからねきたる
男にてぞ有けれ。うまゆだとふるひまれくさ。おくかど

さけびてゆげのく。妻はしりひて。私言許ゆらうにき盗
乃妻とおもをかひつかふに。何をみんおやまりさらむや。妻
盗人にはあらで。髪みだしたる男のちからねさわたるにて
ありけま。されども此盗人。臆病者にてそ。我出る
とくわたる力をはくすがらふりひつまゝ。我いえ
ゆく門おちられば。ぬりのさ痳うすりんも内ゆうし女紙
よもきうじゆさそ退おとくしといひそ衣をしつふりう
亥引ちりゝ。妻いらく。甲斐なきをかりりかくてちなゆき
を取くはんのふるやいぞ。ゆまゆさそ見んとそし
出るみまの夫がさぐりゆく。紙障子にあたりてあれはゞ。

ゐ給まて夫がよたせけりしに。まこれハ盗人おそひか
かりてうけたまく、妻おどろきて声を挙てさけびければ、妻がいそ
ぎ盗人ハにげゆく出まさりて。そのさなるハ陰子(?)れて給まで
かりけるなりといひてけれ。まれさわがるをきくるハ盗人も
おけまとバ、居る給つるそ。裸なる脇をうちてく、ほ給ひける
つまそ。其奴ハ抜てふりが許に入来て、物取て去ける
や。盗人奴陰子給ふみうぎて去にたりけれども、おる
ほしくばかれどもうへそほし。和尚許のほくてて
うくいふぞけるぞといひたれバ、妻ハあさましれてもぞ気色
その後ハ妻が一ツ?の給関ていかくなし難なる也

七　傳大納言傍烏帽子語

今はむかし傳大納言（藤ノ道綱東宮ノ傳故ニ号ス傳大納言ト。兼家公ノ男）といふ人ありける。
その道綱といふ家は一條にありける。其家に
ひさしくつかへける宮なりし内舎人といひし内舎人が
其家にて夜寝しけるが烏帽子を鼠くらひてあらはれ
喰損じけるが。宿直は。宿直壺屋に袖をうづみ
ふるこうの居たる大納言これを聞きふびんにおぼし
まかれるに。けふの烏帽子をこれさらばよしとて
かりければ。此ころの烏帽子をなくして壺屋よりあて
朋輩どもにあひて。かくしたるをみよ。幞冠社冠の
得てきんやへ。乃大納言のまへ烏帽子をこしらへ成
りてきたりて頸を持て。それより袖ふかくあらせ
て居たりしがみて。諸人ことにひらきみてかへりて
はなさえさりけり

八　近江国篠原入墓穴男語

そは昔。美濃国へゆきける下衆男。近江国篠原を
過ぎけるほどに。空くもりて雨ふりきたれ
ふりければ。立やどるべき所やあると見めぐらしたる
に人の気もなき野中なれば。そらくらくべきかたなし
くさまくさ墓穴のありけるをみて。はひいりて[illegible]

有ける程に、ほどなく日もくれ雨はや降さかりければ、今程
けりは此穴にてあかさんとおもひて、奥の方へ入にけり。
かゝりければ打息みて居たりけるに、夜ふくるころ何物とはし
らず入来る音に、これは鬼よ盗人よとおそろしくて侍り
しかれど立入て命をとられしなむと口惜しければ、すこしわき
へそばへさうらひ、かゝりけれどもかくへさ方へよけければ
うしろに寄りかゝり、あまりをびえて居たりけるに、さしの
ぞきありて何かはしらんけれども、此ものうちおきけり
その後ぞうつぶして居たりける音に、始に入たる男おもひ
けるは、これも我ごとくのものにて此所へはいりけるが、雨

ふりける間。此墓穴に入てかくれおりけるが、わなゝきゐたるは
荷物なるべし。次にはかく思ふ所へ、嚢をねぎ
入たるなるべしと思ひて居たり。後に入て侍べ
りけるが、此墓穴に侍りつる神や、おくりつる此餅をなむ
たり。我は此所へ通りけるが、雨にふられて夜もふけ
ぬ。今夜ばかりはとおもひて、此墓穴に入て侍りとひ
けるを聞て、中にいりて見れば、はじめの男是を聞
きて、おそろしさにさぐりければ餅ぞあり
ありけるを取りて食ひてけり。夜明けて此餅を取りて
ひそかに食ひけり。後の男いかにも思ひて

ちぐられなけとればとれ見おりてくらひとさひなる
まやかくれさらはしりてぞおほくなる物と蓑笠とも捨
ゐるおけて去りけれバうらぶらの男されバこそと人のあまり
あやしがり餅をくらひけるにおもひよく〳〵おもひけるに
らひてかりとおもひて捨去りし物ぞとされバ物一つ
入たる袋を康乃ほどてはめり蓑笠もあらむ見
流るゝよりのがれたる奴なるべしめしかりのもぞかろ
とおもひて袋おもてに紙あり首ぐく若蓑笠紙着たる
墓完を出てゆきたるにめしかりける奴や人里に
行てば事となりて人に異してやまさんとおもひ

ばきんがうかしくてげらなふたぐまれしたるか布のふ中
にゆるぞおもてあるれ袋何きくりのほりかうの袋を
あきてみんけるに絹布綿糸紙一つに入てありだけも
うけぬ事なれバ天のあたへとよろこびておもひ
げらるところへゆきたるかたそぞうかりけるさ
なくたり